

サイエンスアゴラ2016のご報告 と新年度の方向性について

国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）
科学コミュニケーションセンター

サイエンスアゴラ2016開催概要

日程： 平成28年11月3日（木・祝）～11月6日（日）

会場： 東京・お台場地域

（日本科学未来館、東京国際交流館、フジテレビ湾岸ST、
産業総研研究所臨海副都心センター、東京都立産業技術セ
ンター、シンボルプロムナード公園）

ビジョン： つくろう、科学とともにある社会

テーマ： 医・食・暮らし／教育・文化芸術・スポーツ／震災復興5年

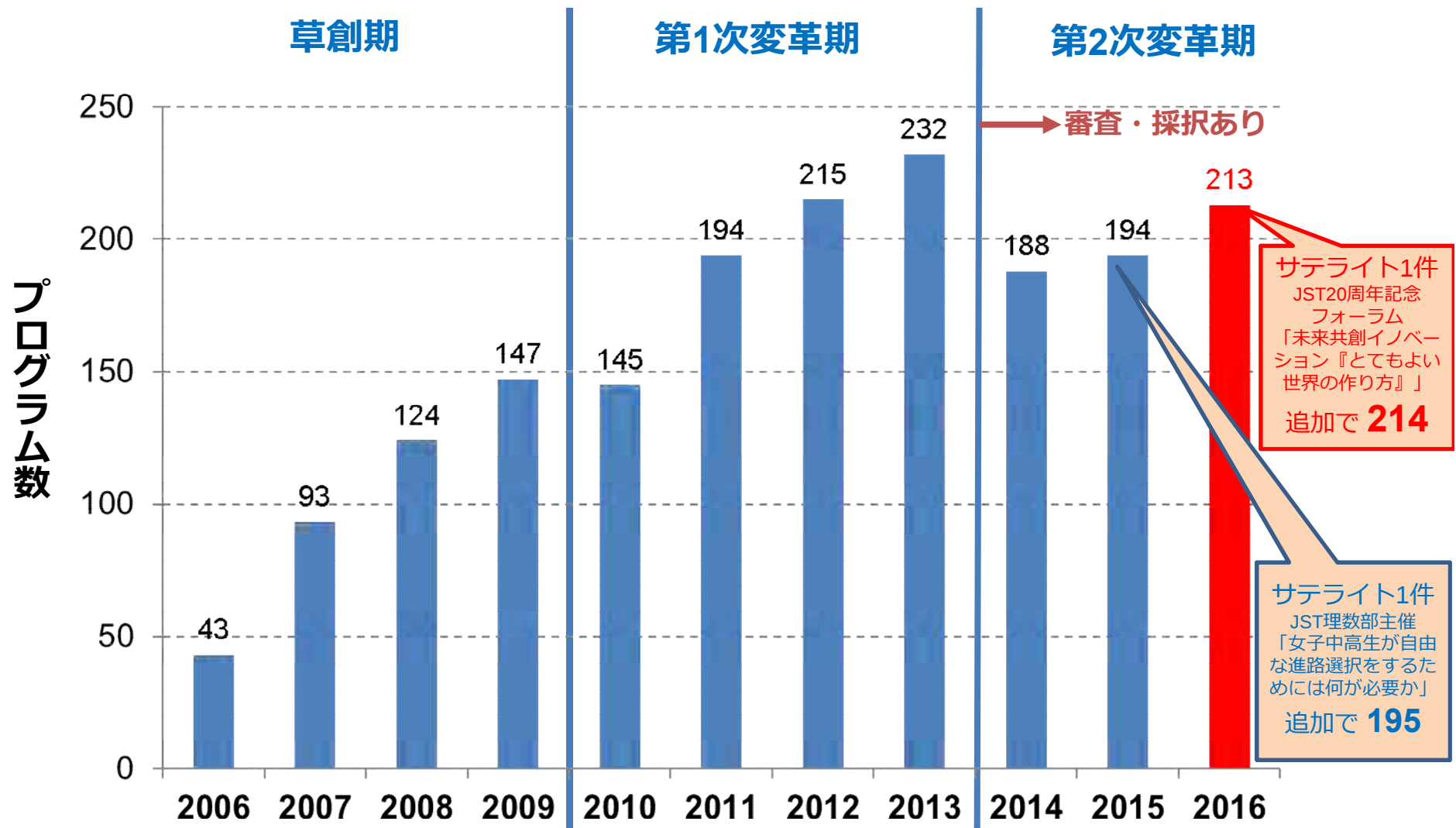
出展数： 214企画 ※サテライト1件含む
（セッション74企画、ブース140企画）

参加数： 9,303人※（うち海外登壇者38名）

※サテライトイベントとして11月4日（金）に開催した
JST20周年記念フォーラム「未来共創イノベーション
『とてもよい世界の作り方』」の参加者を含む



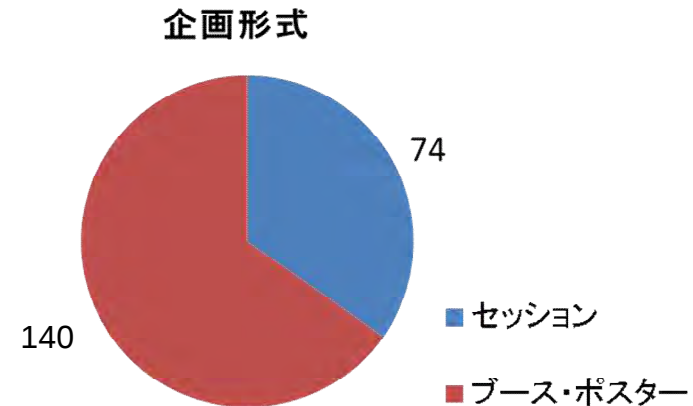
プログラム数の推移



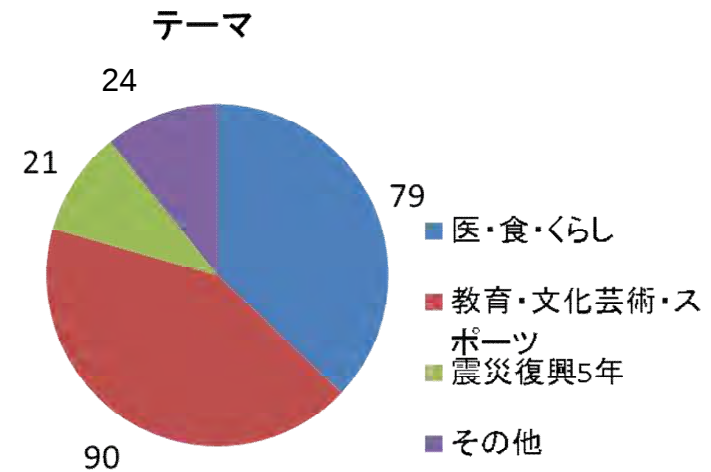
※プログラム数はブース+シンポジウム・WS

プログラムの内訳

企画形式別	2015実績	2016実績
セッション	68	74
ブース・ポスター	127	140
合計	195	214

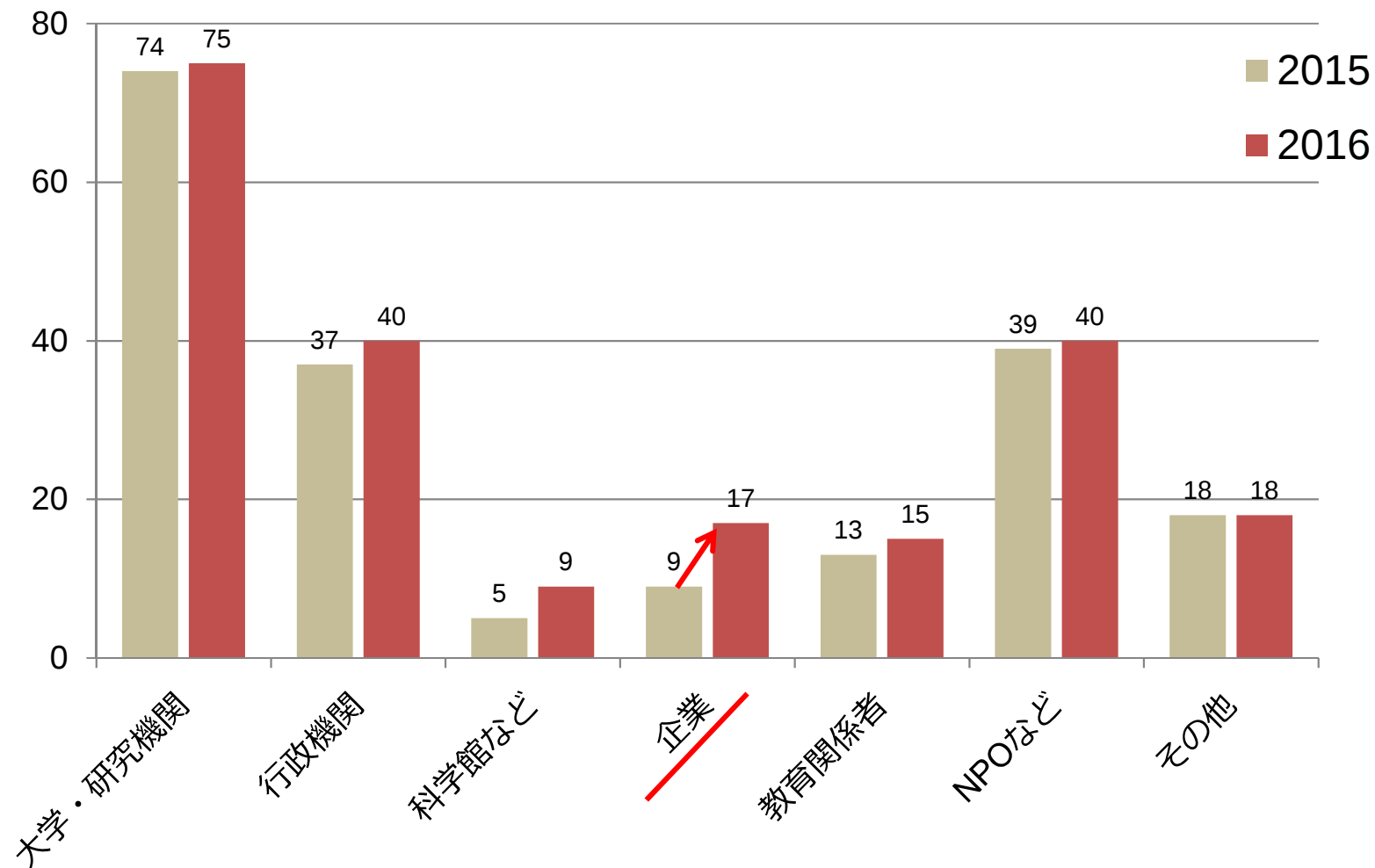


テーマ別	2016実績
医・食・暮らし	79
教育・文化芸術・スポーツ	90
震災復興5年	21
その他	24
合計	214



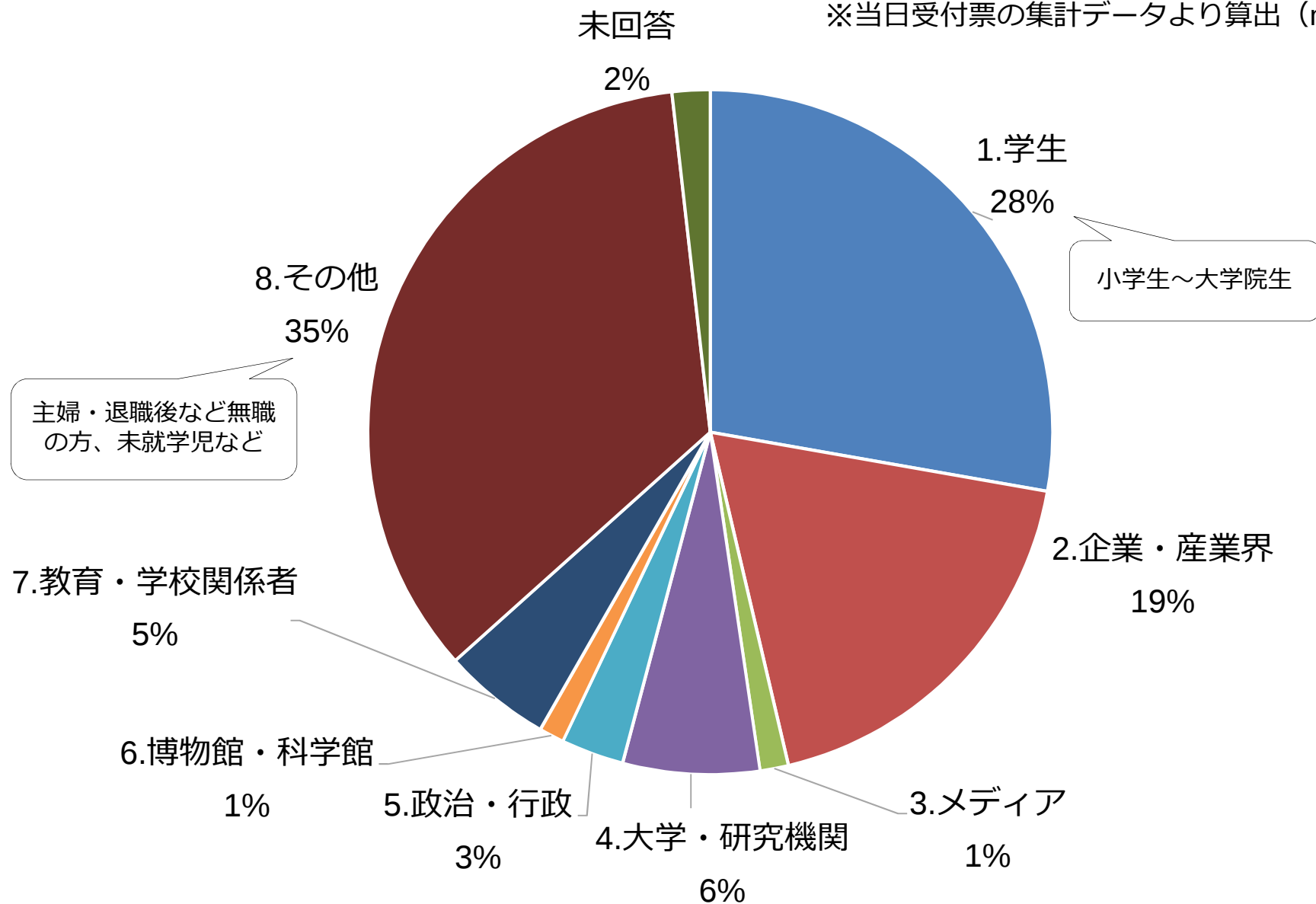
企画提供者の属性

※企画応募書類より集計



来場者の属性

※当日受付票の集計データより算出 (n=5,070)



サイエンスアゴラ2016の特徴

1. 震災復興5年を多様な観点で振り返り

2. 若者を迎え、社会課題についての世代を越えた議論

- 開幕セッション「復興後の未来に向かって—高校生と考える震災復興5年」＜高校生3名＞
- メディアセッション「海外から見た日本の“震災復興5年”と被災地の若者が描く未来社会」＜高校生3名＞
- キーノートセッション「がん予防が切り拓く新しい社会」＜大学生2名、高校生4名＞
- キーノートセッション「震災から5年～いのちを守るコミュニティ～」＜高校生6名＞
- 高校生×イノバートークセッション “Road To Innovation”＜高校生3名＞
- EU & Japan: Let's broaden research horizons!＜大学院生3名＋高校生3名＞
- CSC-CRDS-未来館連携ワークショップ「語ろう！科学への期待」＜大学院生11名＞

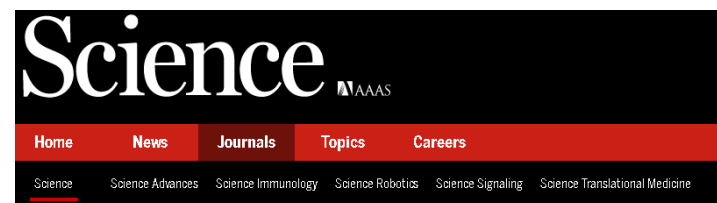
3. 国際的な視点での議論

海外からの登壇者23名（2015）⇒**38名**（2016）

- 「芸術、科学、技術、クリエイティビティ」（駐日欧州代表連合部）
・・・科学とテクノロジーは、クリエイティビティを高めることは出来るのか？
- 「いま世界が直面するSDG s 等の課題解決にイノベーションは何ができるか？」（JST）
- 「ITがもたらす新たな社会 そのビジョン、技術、社会的な課題は？」（JST-CRDS）



Science Vol. 354 (2016/11/25)



ASSOCIATION AFFAIRS

Northeast Asia trip bolsters ongoing scientific cooperation

SHARE

Michaela Jarvis



Science 25 Nov 2016
Vol. 354, Issue 6315, pp. 979-981
DOI: 10.1126/science.125.6315.979



Workers moved bags of contaminated debris after the 2011 earthquake, tsunami, and nuclear accident at Fukushima Daiichi power plant.

tion for Science and Technology (CAST) has shared a partnership with AAAS since 1978, before the normalization of diplomatic ties between the United States and the People's Republic of China.

Continuing that relationship, Holt and Wang met with officials at CAST and renewed a memorandum of understanding to continue collaboration in upholding research integrity and to support education through the advancement of science. This latest version of the agreement between AAAS and CAST will also strengthen ongoing efforts aimed at engaging the public in science and technology; Wang said in a media interview in Beijing.

The trip also included meetings with directors of the Chinese Academy of Sciences; China's Ministry of Science and Technology; the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology; South Korea's Ministry of Science; and KISTEP.

Also this fall, Brian Lin, director of editorial strategy for the AAAS science news service EurekAlert!; Joy Ma, editorial content manager for EurekAlert! Chinese; and *Science Advances* Managing Editor Philippa Benson traveled to the region with a set of complementary goals—to help promote worldwide communication of scientific advances to and from the region, which is in general seeing a dramatic increase in scientific research.

This month's AAAS trips occurred amid an increasing need for science input on global challenges such as climate change and, even more broadly, for achieving the United Nations Sustainable Development Goals, which were internationally agreed upon last year to provide a path for all of society to an environmentally sustainable future. Holt referred to the goals as "an opportunity to communicate the lesson that science exists to benefit humankind and is relevant to people's lives and welfare."

The trip also coincided with an acute lack of public trust in science felt in many countries. In Japan, that lack is connected mainly to the 2011 earthquake, tsunami, and resultant nuclear disaster at the Fukushima Daiichi power plant, which left 18,000 dead and dislocated thousands more. According to online surveys by the National Institute of Science and Technology Policy in Japan, the disaster dramatically reduced the percentage of Japanese citizens confident in science and technology from about 84% to about 40%, although that figure has rebounded to about 66%.

A press conference held at Science Agora and jointly sponsored by JST and AAAS brought high school students who lived in the disaster area at the time of the nuclear accident to speak about their experiences and about their own trust in science with Holt and JST President Michinari Hamaguchi.



Students Yoko Oura, Ryo Endo, and Misato Nakatake and Holt at the JST-AAAS press conference.

学術会議のご尽力に感謝（2016）

人獣共通感染症へのチャレンジ

※キーノートセッション

主催：日本学術会議 科学力増進分科会／日時：11月5日（土）10:30～12:00

登壇者：澁澤 栄氏：日本学術会議第二部会員、東京農工大学大学院農学研究院 教授

甲斐 知恵子氏：東京大学医科学研究所感染症国際研究センター 教授

小田 光康氏：明治大学情報コミュニケーション学部専任准教授，明治大学感染症情報分析センター長、ジャーナリスト

水谷 哲也氏：東京農工大学大学院農学研究院教授，農学部附属国際家畜感染症防疫研究教育センター長

須藤 靖氏：日本学術会議第三部会員、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻教授

これからの高校理科教育のありかた

主催：日本学術会議 科学力増進分科会／日時：11月5日（土）14:00～15:30

登壇者：須藤 靖氏：日本学術会議第三部会員、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻教授

宮嶋 敏氏：埼玉県立熊谷高校教員

真貝 寿明氏：大阪工業大学情報科学部 情報システム学科教授

青野 由利氏：毎日新聞論説委員

戸田山 和久氏：日本学術会議第一部会員、名古屋大学大学院情報科学研究科教授

柴田 徳思氏：日本学術会議連携会員、日本アイソトープ協会専務理事

災害とレジリエンスー平成28年熊本地震災害の教訓ー

主催：日本学術会議 科学力増進分科会／日時：11月6日（日）10:30～12:00

登壇者：和田 章氏：日本学術会議連携会員、防災学術連携体代表幹事

平田 直氏：日本学術会議連携会員、東京大学地震研究所教授

本田 利器氏：東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

五十田 博氏：京都大学生存圏研究所教授

林 春男氏：日本学術会議連携会員、国立研究開発法人防災科学技術研究所理事長

米田 雅子氏：日本学術会議会員、防災学術連携体幹事/事務局長

小池 俊雄氏：日本学術会議連携会員、東京大学大学院工学系研究科教授／水災害・リスクマネジメント国際センター (ICHARM)センター長

サイエンスアゴラ2017開催概要

【日程】 2017年11月24日（金）～ 26日（日） ※3日間

【場所】 テレコムセンタービル（アトリウム、会議室）



※ 2017年度内に地方開催も予定

- ・ 2017年11月 仙台市（世界防災フォーラム2017内）
- ・ 2018年 2月 福岡市科学館
- ・ その他の地域も検討中

サイエンスアゴラ2017予定 (素案)

4月14日 (金) ～5月23日 (火)	企画公募
5月24日 (水) ～7月13日 (木)	企画審査 (6月中旬にプログラム委員会による助言あり) (6月下旬に応募書類再提出あり)
7月14日 (金)	採択企画決定 ※順次メールにて通知予定
8月25日 (金) ※仮	企画配置決定
8月下旬	WEBサイトにて全企画情報公開 開催広報開始
9月上旬	企画提供者説明会・会場見学会
10月上旬	次年度テーマ・開催方針決定
11月24日 (金) ～26日 (日)	サイエンスアゴラ2017開催

サイエンスアゴラのビジョン（新）

※「つくろう、科学とともにある社会」（2015、2016）から刷新

科学とくらし ともに語り 紡ぐ未来

20世紀の科学技術は富や力の追求と並行して発展してきました。しかし限りある地球資源と世界のひずみを前に、今日の科学技術には限界も見え始めています。とくに成長社会から成熟社会へと移行し、多くの問題を抱え先行きの見えにくい今の日本では、関係者が集う場をつくり、科学と社会のこれからをともに考え、互いの考えを尊重して未来を創っていくことが必要であり、その文化を育てていきたいと考えています。また、ともに考え、行動するあり方は、国・地域や文化によって多様であり、日本ならではの方法を模索したいと考えています。

【ポイント】

- ① 「場をつくる」だけではなく、皆が共に考え、未来社会を創り出すという考え方を強調しました。
- ② 「くらし」に込めた考え：一人一人のくらし・生き方に着目することが、ひいては社会全体を考えることになると考えています。
- ③ 「紡ぐ」に込めた考え：未来社会の創造に向けた日本ならではの方法を模索する重要性を込めました。日本ならではの糸紡ぎを想起し、細くバラバラな短い繊維をより合わせて意味のある形に調和させ、一足飛びではなく徐々に創り込んでいく過程だと考えています。

サイエンスアゴラ2017のテーマ

越境する

科学技術の発展の中で、学問分野は専門性が鋭く極められ、物事をより深く追求できるようになりました。しかし、社会の新しい価値に気づき、現代の多様な問題を解決するためには、ひとつの学問分野や立場、世代の知恵だけでは十分ではありません。すでに、様々な壁を越えて人々の知恵を紡ごうとする動きは見え始めています。私たちひとりひとりが心豊かに生きていくために科学技術をどう取り入れていくのか、科学技術には何ができるのか、学問分野、立場、国、文化、世代の壁を越えてともに考える場としましょう。

サイエンスアゴラ2017のポイント

- 従来の複数会場開催からテレコムセンタービル1箇所開催に変更
→フォーラムとしての回遊性向上
- 参加者間の対話を促進する会場設計、ストーリー性のあるプログラム構成を行い、安全性の強化と回遊性の向上を図る
→出展者および来場者の満足度向上
- 研究者、中高生（次世代人材）、産業界の参加者（出展者および来場者）、国際的な参加者の比率の向上を図る
→多様なステークホルダーが集い、議論できる場の実装

学術会議への期待

- 世界中から要人が来るようになってきた。昨年は米国のサイエンス誌にも取り上げられ、サイエンスアゴラの知名度は海外でも上がってきている
- 今年には福岡（新設の福岡市科学館を中心として, 2018.2月初旬）・仙台（世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台2017, 11/25）等でサテライト開催予定。JSTのイベントとしてではなく、各地のみなさんとともに作る場として発展させていきたい
- 学術会議の声明・提言に関する議論の場を主催いただきたい
- 「学問分野、立場、国、文化、世代の壁を越えて」「越境する」企画の出版を期待しています
- 学術会議の「科学と社会」の関係を考える本来活動の一環としての企画のご提供を期待しています